

## 大府市長懇談議事録

2025 年 1 月 27 日

大府市役所 2F 会議室

参加者 大府市長 岡村秀人／教育長 松山靖／教育部長 浅田岩男／

学校教育課長 原田亮男／放課後係長 水野恵朗／放課後係 主任 永井一輝

大府市学童保育連絡協議会 会長 鈴木敬升／同左 事務局 小林裕嗣

冨田麻衣 安藤その美 佐藤和己

／どろんこクラブ 支援員 井村弘美

／わんぱくクラブ 保護者 上野智博 久野舞

／同左 支援員 久永桂太朗 松坂百合香

### ◎岡村市長挨拶

本日は夜分遅い中、お集まりいただきましてありがとうございます。日頃は大府市学童保育連絡協議会（以降、市連協に略）の皆さんにおかれましては、子どもたちの放課後の居場所として活動を継続していただいていることに感謝しております。

今日は、皆さん方の民間クラブの実情をいろいろと教えていただき、我々の公設クラブや行政に反映できるよう、生かしていきたいと思っています。本市では子どもと子育て世帯の視点に立ちまして、育児負担の軽減、保育環境、教育環境の充実、相談支援、そして経済的な様々な支援の取り組みを、積極的に実施をしているところです。

放課後クラブでは、全ての小学校に公設のクラブを設置しており、待機児童を出さないような運営を行っているところです。また令和 6 年度に、新たな取り組みとして、大府小の公設クラブにおいて民間委託をしました。そこで夏休み期間中の昼食提供というのを試行的に行ってきました。これが保護者の皆様に大変好評で、ぜひ他の公設のクラブでも行ってほしいといった要望が強く寄せられています。それを受けて令和 7 年度から大府市内の全ての公設クラブでこういった夏休み期間中の昼食提供を行っていきたいと考えているところです。

また、民間のクラブ（どろんこ、わんぱく）の実情を知るため先日、両クラブに訪問をさせていただきました。支援員さん方、それから子どもたちがゆったりとした放課後の時間を過ごしている様子や、時には学習したりする姿を見せて頂きました。特色のある素晴らしい運営をなさっているというふうに感じました。

わんぱくさんからは引っ越しの課題が色々あるということも聞いています。どろんこさんについては、移転の支援というのをさせていただきました、今後わんぱくさんについても、そういった問題が起きるといことも承知をしておりますので、一緒に解決をしていきたいなというふうに思っています。また、国の補助金については、放課後児童支援員を 2 名以上を配置した場合の補助なども支援に努めています。今後とも民設学童を子どもたちのため、公設同様しっかり運営していただけるよう、保護者の方が安心して働けるように、一緒になって取り組んでいきたいと思っています。本日はそういう意味で有意義な懇談が行われるのを大いに期待をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

#### ◎大府市学童保育連絡協議会会長挨拶

本日はお忙しい中、このような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

ご紹介に預かりました、大府市連協の会長、鈴木です。早いもので、わんぱくに通う娘は今年 5 年生になりました。私事ではありますが、最近とある人文学を取り扱ったラジオコンテンツを聴いております。理系出身の私には新鮮だった内容があり、その道を勉強された方には、誤った解釈などでお叱りを受けるかもしれませんが、私個人の意見として紹介すること、ご容赦願います。

紀元前 100 年頃、ガイウス・ユリウス・カエサルさんという、少し有名な皇帝になられた方がローマにいらしたそうです。ユリウス氏族のカエサル家のガイウスさんだそうです。この方のお父様のお名前はガイウス・ユリウス・カエサルさん。お祖父様のお名前もガイウス・ユリウス・カエサルさん。二人女性の兄弟がいたらしいのですが、他の女性と同じく、二人ともユリウス氏族から取ったユリアさんというお名前だったそうです。当時は家の中で、個人は今より希薄だったのかもしれませんが。子どもという概念はこの時にはなく、大きくなって人間となる、それまではちょっと賢いサルみたい、と捉えられていたとか。そして大きくなって一番仕事ができる子が家と名を継げたそうです。

このような子どもに対する無関心は、死亡率が 5 割にも達していたことから、生まれた子全員に愛情を注いでいたら、半分死んでいくわが子への悲しみで親の心が壊れてしまうのを防ぐためでもあったかもしれません。そんな理由からか、ガイウスさんも幼少期の記録は多くはないそうです。それから時代は飛んで、1700 年代、ちょっと有名な哲学者のルソーさんが、エミールという架空の孤児をマンツーマンで育てる教育論の本を書き、子どもは小さな大人ではなく、子どもであるとして、成長に即した教育を提唱したそうです。この時代のいろんな人によってようやく子どもという概念が発見されたそうです。

また、フランス革命が起こって国民国家による人権が認められるようになると、財産相続の相手として子どもをエリート教育しようとする動きが出始めます。これは子どもに対する無償の先行投資で、コストに見合った執着が発生し、その執着が転じて子どもへの愛情が生まれた瞬間でもあります。そして対となるように子どもから親への愛情も生まれました。という考え方もあるそうです。今、私が自分の娘を愛おしいと思えて、親として成長し充実していることそのものが、

昔のすごい天才たちが考え抜いた末の、長い歴史の上に立っているのだなと思います。その延長線上として、「進化」ではなく深く化ける方の「深化」した先として、子どもがいろいろな経験をして成長する場として、学校以外に、スポーツ少年団や塾、習い事があり、その一つが民間学童なんじゃないかと思っています。そんな民間学童へのこれまでのご理解に感謝すると共に、本日は民間学童が抱える課題や活動をより知っていただきたく、有意義な時間にしたいと思っています。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

◎自己紹介 ※省略

◎わんぱくクラブの引っ越しとどろんこクラブの現状報告について（小林）

※資料をもとに説明

◎意見交流

富田：わんぱくクラブの空き物件についての補足なのですが、先ほどの表にあった物件の他に、最近もうひとつ、わんぱくのすごく近くでお家を貸してくださるという方がおられて、見学に行きました。一戸建てで、庭もあって、間取りも十分な広さで、よかったです。昭和56年以前の建物ということで、耐震基準を満たしておらず、しかし、耐震工事の資金がわんぱくクラブにはないので、本当によい物件でしたが、断念せざるを得ない、ということがありました。

上野：会長の伊尻さんと一緒に近くの物件を探しております。自分だけでも、休日に犬の散歩などで、近くを探しています。そして、こういうところがありそうだけど、と運営委員会で話を出して、話し合っています。この中の物件もそういう風に話し合ったものです。やってみて思ったのですが、持ち主を特定するのがとても困難です。回覧板に回すなどして並行してやっていきたいのですが、持ち主にたどりつけるかが、問題です。空き家バンクなどはどうでしょうか？我々ではなくても、他にも全世代サロンだとか、探している方もおられると思います。そういうような状況です。

市長：空き家はいい物件だと思っても、持ち主がわからないなど、北崎学区ではあるのですか？

上野：一軒あったのですが、空き家だろうと思ってみたら、しばらくしたら売り物件になっていました。また、神田小の裏に物件があると聞きましたが、ただ両脇が家なので、どろんこさんと同じ状況になってしまう心配があります。（空き家が）あることは、あるのです。ただ持ち主さんがわからない、誰に聞いてやればいいのかもわからない状況です。

市長：市としても空き家対策はもちろんありますが、重点としては今にも倒れそうで、周りの方に迷惑がかかる物件に対して地主を探して要望する、場合によっては代執行で取壊しを行うものです。もうひとつ、空き家をなんとか活用してほしいという方には空き家バンクのような登録制度があります。しかし、その中間の、家をほったらかして、今にも倒れそうというような家ではない家のことは、なかなか市としてもアクションする手だてがない、という（今の実情としてはそんな）状況です。耐震についても、今住んでいる方が耐震改修したいという意向があれば、その人に対しての、全額ではないにしろ、市からの改修費の補助制度があります。なので、それを使っていただいてその後にクラブに貸す、という状況になればと思います。

井村：民間学童で改修するのは自由ですが、こちら（所有者）で改修してから貸すのはできないよ、と、どろんこの時も言われました。

市長：確かにね。そのへんの問題も考えないと…。この前、七福神まつりで周りしましたが、（けっこう）最近の神田小付近は新興住宅地がけっこうありましたね。

原田：どろんこさんは、この前見学させていただきましたが、最近の状況はどうでしょうか？

小林：最近ごあいさつに行った時にも子どもの声に関しては大目に見てもらっていると感じています。父母会で継続して対策を検討していることをお伝えして、工事で使っている防音シートなど使ってはどうかなど、近隣のかたにもお話している状況です。

今では、以前にした対策が不十分だったとも思っています。設置した板が薄すぎて振動しているのではないか、という状況です。今後の対策も何をどこまでやるのが決めにくい状況ではあります。

井村：声に関しては、どうしても響くことはあります。子どもの声のトーンは高いため、お家の中でお仕事されているようで、余計に叱られたことがあります。

市の方に苦情を言いに行く、とおっしゃっていて、苦情はありましたか？

水野：ないですね。

井村：（車の）ドアを閉める時も、（駐車場の）外に出てからドアを閉める、などしています。子ど

もたちにも「忍者のように」と言っています。桃山公園などを遊び場のひとつとして使わせていただけるといいかなと思っています。

#### ◎大府市の子どもたちの豊かな放課後について※資料をもとに説明

#### ◎意見交流

佐藤：指導員として子どもたちの気持ちに寄り添うことがとても大事と考えています。国の動きですが、子ども家庭庁ができ、2023年4月に『こども基本法』ができました。子どもが真ん中にいる社会というのが目標とされています。それは、子どもひとりひとりが大切にされ、みんなが自分らしく、幸せに成長でき暮らせる社会の実現を目標とされています。学童保育における保育内容は、「特色ある保育」と表現されていますが、『こども基本法』の目標や理念に重なりつながらんと思っています。これからも「共同の子育て」、「みんなで作る保育内容」を大事にしていきたいと思っています。

今、巡回アドバイザーとして活動するなかで、いろいろと考えることが多くなりました。改めて自分の生き方、価値観、自分の物差しが問われているのではないかと感じています。

わんぱくや、どろんこの子どもたちだけでなく、不登校になっている子どもたちが増えています。なんとかしたいという思いがあります。学童のなかにも困窮家庭があり、なんとかしたいなという思いがあります。「三つ葉」さんや「子ども食堂」の子どもたちと接する機会が増えたことも理由だと思いますが、子どもたちを前にして、子どもたちが自分らしく幸せに成長でき暮らせる社会にしてあげているか？と思うことが多くなっていて、“腹をくくって子どもたちと関わる覚悟ができていないか”、と問われていると思います。子どもたちと接するときは「いっぱい失敗していいよ」「わからないことはわからない、イヤなことはイヤって言っていいよ」というメッセージを伝えたいと思っています。他者との比較の「ものさし」で失敗を怖れたり、傷ついたりしないで「自分らしさを発見できるように、チャレンジすることをみんなで支え合うような仲間づくりをめざそう！」というメッセージを感じてもらえるような時間をつくっていききたいと思うようになりました。

6年間という学童期は幼児から思春期前期まで、体も心も劇的に成長する時期です。心配なのは、放課後の自由な時間がずいぶん少なくなっているなと思っています。40年前と比較して、遊びを通して育ちあっていく異年齢集団もできにくくなりました。遊びの内容もお金がないと体験できないような遊びとか、消費的なものになってきて、子どもを取り巻く環境も様変わりしています。ここは、私の問題意識なので、みなさんとの意見交換が必要です。「三つ葉」さんなどで、こまやけん玉ができた子どもが、「できた！」とニコッと笑ってくれるのを見ると、すごく大事な時間になっているなと実感します。学童保育は子どもたちが「ただいま！」と帰ってくる所です。しかし、学校から「疲れた…」と帰ってくる場合があります。昼間のおうちですから、家庭的で安心安全の居場所が確保されることが大事なのですが、「特色ある保育」と評価していただいている内容は、放課後の子どもたちの豊かな遊び、生活として、全ての子どもたちの必要な内容なのではないかな、とますます思っています。

資料にて報告させていただきましたが、家庭や学校との連携はもちろんのこと、地域との連携もさせていただいております。大府市にはとてもたくさんの市民活動があって、実践が広がっています。そんな市民活動とつながりながら、民間学童も「みんなでつくる大府市」の仲間として存続できたと思います。自立の努力は続けていますが、父母会運営で経営も担う保護者のみなさんの大変さもありますので、引き続きご理解とご支援がいただけたらありがたいな、と思っております。

久永：市長さんとの面談に向けて、わんぱくの卒所生としてなぜ自分が6年間通い続けたのかなと考えた時に、たとえば境川へヌートリアの巣に行ったり、ザリガニを捕まえたり、長期休暇には、わんぱくの仲間たちで泊まったりしたことを思い出したら、楽しかった思い出しか思い出せなかったです。

現在の6年生にもなぜ6年間わんぱくに通い続けたかを聞く機会がありました。「卒所旅行が楽しみ」とか「リーダー合宿が楽しい」「1年生から6年生で遊べる」という声があり、6年間通い続ける1番の理由は、わんぱくが「楽しい」という事にあります。通い続ける理由が今も昔も変わってないなと感じました。子どもたちが「楽しい」と思う裏には、地域の方々や、父母の方々様々な支えがあつての事だなと感じました。

原田：先ほど、佐藤さんが言われました、「三つ葉」さんとの連携をどんなものか具体的にお聞きしたいです。先日、「三つ葉」さんを見学させていただいて、個人としては、わんぱくやどろんこ活動の雰囲気は同じと感じました。なにかこれから計画されていることなどありますか？

佐藤：月曜日に座談会があり、金曜日にフリースクールがあります。そこのお手伝いを自分がさせていただいています。なぜそうするか、というと、学童出身の子が不登校になっているということもあって、来てくれて関われたらいいな、と思ったからです。そこでまた一緒に過ごす中でつながりができ、情報を伝えることができています。なにかができるのかはわからないのですが、子どもたちが元気になるようにと思って活動しています。基本的に巡回アドバイザーですから、「どろんこ」と「わんぱく」の保育を見て感じたことを指導員さんに報告して、一緒に考えることが私の役割のベースです。

「三つ葉」さんや、「子ども食堂」でやっていることは、ボランティア的に私が個人的にやっていることですが、つながっているかな、と思っております。その辺りは今、整理中です。

松山：せっかくなので、話をさせていただいていいでしょうか？

今不登校の話が出たのですが、変な質問ですが、学校に行けていない子で、学童になら行けるといふ子はいますか？

井村：います。今、学校に行けていなくて、「レインボーハウス」と「三つ葉」さんに行きながら、どろんこに毎日ではないけども、自分の体調のいい時に来てみんなと遊んだりしている子もいます。土曜保育は比較的人数が少ないので、その時に来たりしています。

松山：わんぱくさんにはいますか？

佐藤：今はいません。

松山：そうですね。先週、実は、校長会がありまして、校長先生方をお願いしたことがあります。

挑戦すること、失敗をどう認めていい雰囲気をちゃんと作るのか、「受援力」という言葉を伝えました。助けてと言えるそういう環境をまず育ててほしいと。そういう学校の空間を作っていかないと、不登校の子たちが居場所をどんどん失っていき、勇気も自信も失っていくので、やっぱり認めてもらいたいということ。

そして、今、わんぱくの活動を見ましたが、中学校の教員が中心だったのですが、特別活動ってありますね。今、海外でも見直されている、動画になって出ているぐらい。体験することで、学べることもものすごく大きい。さきほどあったリーダー研修もそうだし、野外的な活動もそうだし、ちょっとした縦のつながりから、そこから学べること、今、見ているといろんな行事が位置づけられていて、子どもたちが成長できています。小さなコミュニティとして成り立っているのです、とても魅力的だと感じました。学校も時間がどんどんなくなってしまって、本来ならもっと楽しい環境でなくてはならないのに、それがやれないところを上手に補っていただいているな、感じました。

その特別活動の大きな柱となるのは、子ども、保護者、学校の三者がしっかり話し合うという、先ほどそういうお話ありましたよね、それができている、ということです。そして、父母会でなにがいいかなどの判断をしっかりされている。それも大事だね、と思いました。ですので、特別活動をするためのシステム作りができているな、と感じました。ただ、これを本気でやっていくということは大変です。学校でも働き方改革があり、あまりできなくなってきました。教員も、（そういういったことを）やりたい人もいるのにできない現状です。

しかし、この民間学童の良さは、小規模でできるということはあると思いますね。保護者同士が理解して進められる。大きい集団だといろんな人がいるので、単純な意見では進まなくなります。そういう違いもあります。だから、この規模でやれる学童の良さを改めて感じました。ですから、保護者のみなさんの無理のないところで、細く長くずっとつづけられるような活動を工夫することも大切だと思いました。感想です。

井村：放課後クラブに3年生まで通っていて、4年生からどろんこにかよっている双子がいます。その子が今6年生になって、「もしどろんこに来ていなかったら、低学年をかわいいと思うことも

なかった。」と言ってくれたことがあって、「生まれ変わったら、今度は1年生からどろんこに入るようにしたい」って言ってくれるのが、すごく嬉しいなと思いました。同時に、放課後クラブはクラス替えがありますから、同じ仲間たちというのが作りにくい、というのがすごくあります。このお姉さんと遊びたいと思っても、次の年にはクラスが違って、ということがあり、そういうクラス編成についても同じクラスでできるといいかなと思います。また、同じ支援員さんが何年もいて同じ子どもを見られるといいのかな、と思います。

松山：今日はありがとうございました。それぞれの民間の学童がどんな思いを持ちながら経営されているか大変よくわかりました。こういう会は大事にしたいなと感じております。特に最後にお聞かせいただいた、「生まれ変わったら1年生からどろんこに入りたい」というのは最高の褒め言葉ですね。そういうお子さんたちを育てていただけるように、大府市も精一杯支援の努力は（こちらにも）させていただこうと思っています。こちらにも公設の放課後クラブはあり、その良さもあると思いますので、そちらも含めながら、一緒に大府市の子どもたちの笑顔を願ってがんばっていきたいと思います。よく先生たちに言うのは、赤ちゃんは生まれた時に笑顔で生まれましたよね。その笑顔を見ると、大人でにらみつける人はまずいないですね。ちっちゃいうちは、みんな笑顔をしている。なので、その笑顔に対して大人たちも笑顔で返していかなければと思っており、そんな思いでやっていただいていると信じておりますので、これからもよろしく願いいたします。今日は貴重な時間をありがとうございました。